

大学での英語学習課外活動の立ち上げに関する実践報告 － ITC (Intensive Training Course) 合宿を通して－

関谷 弘毅

Reflections on the Implementation of a University's Extracurricular English Activity:
The Case of an English Intensive Training Course

SEKITANI Koki

Abstract

This study serves two purposes: (1) to report a two-day Intensive Training Course of English (ITC) initiated by university students; (2) to analyze the process of cognitive and affective changes experienced by the students during the preparation and implementation of the course. Three university students engaged in initiating the course, and six university students participated in this event. The contents and process of each activity of the course were reported. Analysis of the interview results revealed 10 concepts and 4 categories, and showed that the combination of awareness of resources for English learning and expert advice played a key role on a start-up of the new event. Changes of other concepts such as awareness of English ability and motivation for English learning were also discussed.

Keywords: 英語学習、課外活動立ち上げ、合宿、ITC (Intensive Training Course)

問題と目的

背景

長年日本人の英語学習者の英語力の低さが指摘されている。TOEFL iBT®の作問・実施団体であるETS (2015)によると、日本人の平均点は、71点(120点満点)で、アジアの30か国・地域で25位である。大学に目を向けると、石橋・三輪(2014)が問題視するように、外国語として英語を学ぶ環境(EFL)にある日本人大学生は、教育機関の公式な学習だけでは学習時間が圧倒的に不足しており、授業外学習で補う必要がある。そこで本研究は、新たに課外活動として立ち上げた英語学習集中合宿(Intensive Training Course of English, 以下ITC)の実践報告をするとともに、立ち上げに関わった学生の認知面と情意面の変容を分析することを目的とする。

先行研究

これまでもESL/EFL学習者に対して、一般教科を第二言語や外国語で学ぶ教育法であるイマージョンプログラムの位置づけで行われた集中的な学習の実践及びその英語学習への効果については多数報告されている(e.g. Liskin-Gasparro, 1998; Walker & Tedick, 2000)。その中でもRugasken, K., & Harris, J. A. (2009)は、タイの学生を対象に教室での学びやフィールドトリップを含む15日間の合宿という形態で実施し、ライティング能力の向上、文化への理解深化が見られたことを報告している。また、国内においても藤井他(2014)は日本人大学生を対象に3日間のイマージョンキャンプを行い、英語学習へのモチベーションの向上、異文化への理解促進、英語を話すことへの抵抗感の減少といった効果が見られたと報告している。

一方で、イマージョンプログラムとは明記されていないものの、プログラム期間中英語のみ、またはほぼ英語のみで行われた合宿についても報告が蓄積されている (e.g. 智原・加藤, 2008; 桜井, 2015; 二五, 2015)。これらの研究では共通して、参加者の合宿に対する満足度は高く、参加することによって総じて学習意欲が高まることが報告されている。特に智原・加藤 (2008) は合宿前と合宿後での TOEIC の得点の上昇に有意差を見出し、英語力に関する客観的な伸びを検証した貴重な報告である。

以上の先行研究はプログラム内容も詳細に記述され、かつ教育効果も検証されているもので、実践的価値が高い。しかし、課題として次の点が挙げられる。

上述の取り組みはいずれも報告された時点ですでに制度化されたプログラムであり、比較的恵まれた人員、資金の元で実施されているもので、萌芽期のものではない。こうした取り組みを行っていない教育機関が、新たに課外活動を立ち上げようとした際に、必ずしも包括的に必要な情報を与え切れていない可能性がある。

目的

そこで本研究は、新たに課外活動として立ち上げた ITC の実践報告をするとともに、立ち上げに関わった学生の変容を分析することを目的とする。具体的には、第一に ITC 合宿までの準備過程と活動内容を詳細に記述する。第二に活動に携わった大学生に対して事後に半構造化面接を行い、彼らの認知面、情意面の変容について分析する。

方法

ITC の実施

(1) 時期と場所

2016 年 2 月 12 日午前 10 時から 13 日 12 時まで実施された。場所は筆者の勤務する大学の教室と学内の宿泊施設で行われた。

(2) 教育における位置づけ

本合宿は、日本語を一切禁止のうえ、様々な言語活動を通して英語力を向上させることを目的に、単位認定を伴わない課外活動の 1 つとして大学で行われた。

(3) 構成メンバー

地方私立女子大学に通う大学生 9 名 (1 年生 2 名、2 年生 4 名、3 年生 3 名) 及び教員 (筆者) 1 名。このうち、合宿を組織し運営するのは、TA (teaching assistant) と呼ばれる英語教育を専攻、もしくは専攻を志望する 3 名の学生 (3 年生 2 名、2 年生 1 名) であった。彼女らは代表の学生の呼びかけに応じて代表自身とともに TA グループを組織した。残りの 6 名の学生は一般参加者で、非英語専攻、もしくは専攻が未定であった。また、教員は必要に応じて TA への助言、及び事務的業務を担った。

(4) TA による合宿の組織

TA は教員の助言のもと活動を立案し、計画、実施、運営にあたった。活動の基本形態は、4～5 名程度の小規模グループのものと全体によるものとに分けられ、進行役は TA が担った。事前に約 10 回のミーティングを開き、実施する活動を立案、計画、練習した。

(5) 準備

TA は活動内容を決定した後、各活動の担当者を割り振り、仕事を分担した。活動に用いる英語素材探し、それらの加工やワークシートの作成、印刷、音声教材の準備、機器の用意から楽しい雰囲気づくりのためのデコレーションに至るまですべて準備した。また合宿が近づくにつれ、活動の進行役を行うためのリハーサルを何度も行った。

(6) 教材

各種教材 (音声教材、文字教材、ワークシート、教具など) は TA が自作した。参加者が普段英語を使うことに慣れていないことに鑑み、中学・高校生向けの素材や、比較的易しめの真正な (authentic) 素材を活動の内容に合わせ加工して使用した。

(7) 合宿の流れ

受け付け、事務連絡、諸注意伝達が完了後、TA が合宿の開始を宣言した。宣言は 10 から 0 までのカウントダ

ウンを日本語で行い、参加者と一緒に唱和した。カウントダウン後は、活動だけでなく、休憩や食事などの時間も一切日本語の使用は禁止された。合宿が開始されると、TA が計画に沿って活動を運営した。参加者は TA の指示に従い、5 名程度からなる小グループに分かれて各部屋で活動を進めた。活動によっては全員が大部屋で行うものもあった。各活動は短いもので 30 分、長いもので 3 時間であった。

2 日目、全活動を終えたのち、TA が閉会を宣言した。宣言は 10 から 0 までのカウントダウンを英語で行い、参加者と一緒に唱和した。カウントダウン後、日本語の使用禁止は解除された。

(8) 活動内容

活動は、表 1 の示すスケジュールで行われた。以下各活動内容と手順の詳細を記す。

表 1 ITC のスケジュール表

	第 1 日	第 2 日
7 00		起床
8 00		朝食
9 00	受付/開会	Loudspeaker
10 00	Ice Breaking	Speech (Preparation)
11 00	Song Transcription	Speech (Presentation)
	Secret Friend (Explanation)	Secret Friend (Disclosure)
12 00	昼食	閉会 昼食
13 00	Word Game	
14 00		
15 00	Skit (Preparation)	
16 00		
17 00		
18 00	夕食	
19 00	Skit (Preparation)	
20 00		
21 00	Skit (Presentation)	
	1 日目終了 就寝	

A. Ice Breaking (“Who am I?” Game)

- ① 活動の開始をアナウンスする。参加者全員で大部屋で行う。
- ② TA が各参加者の背中にアニメーションのキャラクターの絵と名前がかかれた紙を貼る。貼られた本人は何かがかかれているかはわからないように配慮し、自分がだれかを当てるのが目的であるので見ないように注意する。
- ③ ④～⑧の活動の手順を、寸劇によるデモンストレーションを用いながら説明する。
- ④ 部屋の中を歩き、パートナーを見つけ、簡単な自己紹介をする。
- ⑤ “Am I a girl?” “Do I like *Dorayaki*?” といった、yes/no で答えられる質問を一つだけパートナーにする。パートナーは yes/no で答える。
- ⑥ 交代し、同様の質問をパートナーがするので、それに対して yes/no で答える。

- ⑦ ④～⑥を繰り返す。最終的に、“Am I Doraemon?” “Yes!” のような形で自分のキャラクターがわかるまで続ける。
- ⑧ 自分のキャラクターがわかった時点でその場にしゃがむ。

B. Song Transcription

- ① 5 名程度の小グループに分かれ、各々小部屋に移動する。
- ② 歌をはじめから最後まで聞かせる。
- ③ どのようなテーマの歌だったかを尋ね、その根拠などを議論する。
- ④ 2, 3 行 (10 ～ 15 語) ごとに区切り 4, 5 回ずつ聞かせ、歌詞をノートに書きとる。
- ⑤ 各参加者に書きとった内容を尋ね全員で共有する。TA はこの時点では正解は教えず、意見が割れた個所、だれも聞き取れなかった個所についてはヒントを与える。
- ⑥ 再度聞き各参加者に新たに書き取れた個所を尋ねる。この時点で正しく書き取れた語については正解であると伝える。書き取れない語には再度ヒントを与える。
- ⑦ さらにもう一度聞き、各参加者に⑤で正しく書き取れなかった個所を尋ねる。参加者から正解が出てなくてもこの時点で正解を伝える。
- ⑧ 同じ個所を流し、正しい歌詞通り聞こえるかを確認する。
- ⑨ 次の 2, 3 行に進み、③～⑦の手順を繰り返す。歌の 1 番をすべて終えることが理想であるが、活動時間が終了したらその時点で打ち切る。

C. Secret Friend

- ① ②～⑥に示す活動の手順を TA の寸劇と模造紙によるデモンストレーションを用いながら説明する。
- ② 参加者の名前の書かれた紙をくじで引く。その名前の人物は自分の secret friend となる。自分の secret friend がだれであるかは他人には言わないよう伝える。
- ③ 自分の secret friend あてに手紙を書く。内容は自由で、差出人は自分の名前ではなく “Your secret friend” とし、自分が誰であるかのヒントを一つ書くようにする。
- ④ 書いた手紙を部屋に設置したポストに投函する。
- ⑤ TA がポストに投函された手紙を宛名の参加者に届ける。
- ⑥ 同様に自分にも手紙が届く。ヒントなどからその人物が推測できても本人に “Are you my secret friend?” などと尋ねてはいけないことを伝える。
- ⑦ 手紙はそれぞれ 1 日目の午後 1 時、6 時、11 時までに 3 回書くことを伝える。
- ⑧ 2 日目の合宿終了直前に、全員が自分の secret friend が誰であったかを発表する (Secret Friend Disclosure)。

D. Word game

この活動は、ゲストとして招待した英語ネイティブ教員が立案、進行を行った。

- ① ゲストとして迎えたネイティブ教員を紹介する。
- ② ネイティブ教員が任意の英文を 1 文聞かせる (e. g. Lisa is a high school student.)。
- ③ 参加者から 1 人を指名し、つながりのあるストーリーとなるように新しく英文を 1 文考え、発表する。
- ④ 別の参加者を 1 人指名し、同様に 1 文考え発表する。
- ⑤ ④を 2 周繰り返す。
- ⑥ 条件を変え (7 語以上からなる文にするなど)、②～⑤を繰り返す。

E. Skit

- ① 活動の開始をアナウンスし、5 人程度の 2 つのグループに分ける。
- ② 寸劇のテーマのかかれた紙をグループの代表が引く (テーマは “pure love” と “love affair” であった)。
- ③ 各小部屋に移動し、テーマに基づく 5 分程度の寸劇を作るにあたり、ストーリー、配役、セリフ、演出を話し合いながら考え、練習する。
- ④ すべてのグループが大部屋に集まり、寸劇を発表する。

- ⑤ 発表後無記名投票により“best actress award”(最優秀女優賞)を決め表彰する。

F. Loudspeaker

- ① 5人程度の2つのグループに分ける。
- ② 1人指名し、ヘッドホンを付けてシャドーイングする。教材は中学2～3年生レベルのもので、長さは60秒程度。他の参加者はそれをノートにすべて書き取る。
- ③ 交代し別の参加者がシャドーイングをする。②でシャドーイングしていた参加者を含む他の参加者はそれをノートにすべて書き取る。
- ④ 以降、3周(1人につき3回)終わるまで繰り返し交代して行う。目安は各参加者の書き取りが9割程度完成するまでとし、3周で十分でなければもう1周加える。
- ⑤ TAが各参加者の書き取ったものを1文ずつ別の紙に大きく書いて示し共有する。Song Transcriptionと同様、正解は教えず参加者によって異なる個所を確認する。
- ⑥ 異なる個所を確認するため、もう1周②の要領でシャドーイングを行う。
- ⑦ 複数の意見が出た個所に関してどれが正しいかを再度確認する。正解は教えない。
- ⑧ ヘッドホンをはずして全員でCDを聞く。
- ⑨ ⑦で確認したトランスクリプトが正しいかの最終確認をする。
- ⑩ スクリプトを渡しもう一度聞く。
- ⑪ CDに合わせ、ヘッドホンをはずし全員でシャドーイングをする。

G. Speech

- ① 大部屋に参加者全員を集め、自由なテーマで2分間程度のスピーチをすることを伝える。旅行、春季休業の計画、趣味、アルバイト、将来の夢などを例に挙げる。
- ② TAがスピーチの基本構成(introduction, body, conclusion)を説明する。
- ③ よいスピーチにするためのコツ(原稿をなるべく見ないこと、アイコンタクトやジェスチャーを適切に使うことなど)を伝える。
- ④ スピーチ原稿を準備する。
- ⑤ スピーチを1人ずつ発表する。発表後は質疑応答の時間を取る。

TAへのインタビュー調査

(1) 対象

3名のTAのうち、2名を対象とした。そのうち1名は代表(3年、英語教育専攻)もう1名は一般のTA(2年、英語教育専攻)であった。なお、TAのうちもう1名を加えなかったのは、事情により全プログラムに参加できなくなり、本研究の対象者としてはふさわしくないと判断したためであった。

(2) 内容と手続き

合宿終了後、調査の目的と内容、倫理的配慮を説明し、同意を得たうえで、個別の半構造化面接を行った。「英語学習課外活動の立ち上げを通じた大学生の認知的、情意的変容」を探ることを分析テーマとし、具体的には、「ITCを企画しようとしたきっかけは何か」、「ITCの準備を通して英語学習の方法や意欲はどのように変わったか」、「ITCの実施をして英語学習の方法や意欲はどのように変わったか」の問いを投げかけた。面接時間は、1人約30分で、事前に了解を得たうえで、ICレコーダーで録音した。

(3) データの分析方法

質的研究法のうち、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を参考にして分析した。面接内容の逐語データをすべて書き起こし以下の手順で分析を進めた。

第1に、具体例を抽出した。対象者の逐語データから、分析テーマと関連する箇所に着目し、概念の具体例とした。第2に、概念の解釈を行った。解釈にあたっては、分析テーマに対する答えを意識しながら概念を生成した。第3に、概念の吟味を行った。他のデータとの関連から概念名の妥当性の検討を行い、必要に応じて修正した。第4に、カテゴリーの生成を行った。具体的には、概念がある程度生成されたら、それらの関係性を検討した。第5に、

カテゴリーグループの生成を行った。具体的にはカテゴリーが生成されたのちその関係性を検討した。

結果と考察

インタビューで得られたデータを分析した結果、10 の概念、4 のカテゴリー、2 のカテゴリーグループが得られた。結果を表2に示す。

表2 英語学習課外活動の立ち上げを通じた大学生の変容

カテゴリーグループ	カテゴリー名	番号	概念名	件数
知識・認知面の変化	言葉の機能と 学びに関する気づき	1	学習環境・リソースへの意識	50
		2	言葉の機能への気づき	5
		3	自分の能力への気づき	5
		4	学習法への気づき	4
	活動の立ち上げ・ 運営についての学び	5	活動の立ち上げ・運営についての気づき	30
		6	今後の展望	8
情意面の変化	上昇志向	7	英語の学習意欲	18
		8	多様性への接触欲求	8
		9	新しい知識への好奇心	3
	自分の将来	10	自分の将来	24
合計				155

カテゴリーごとの分析

(1) 言葉の機能と学びに関する気づき

「学習環境・リソースへの意識」、「言葉の機能への気づき」、「自分の能力への気づき」、「学習法への気づき」が含まれる。以下にそれぞれ具体例を示す。なお、対象者 A は TA の代表者 (3 年生)、B は一般の TA (2 年生) である。

あれをやりようと思ったきっかけは、まずやっぱり、〇〇先生(筆者)が去年△△大学(Aの所属大学)にいらして、で、あの、先生が高校、じゃない、大学時代で ITC でこういうのやってた、英語合宿をやっていたよっていうのを聞いて、で、まあ、実際その授業、英語科教員演習でしたっけ。

(インタビューデータ、A)

これは「学習環境・リソースへの意識」の例として、ずっと学習環境を模索していた学習環境に関して、筆者の体験談から企画を思いついたプロセスが語られている。また、次のような例もあった。

で、そのお金をかけずに、その、なんていうんですかね、英語に囲まれる環境って日本にないじゃないですか。でその留学に行くのにお金かかるし、で、現地の生活とかどうするとかまあ、不安とかしゃべれるのかなとか、いろいろあると思うんですけど、そういうのをまあ、ここでやることによって、まあ、普通に普段学校に来るような感じで参加して、学校に一泊友達と一緒に泊まる。

(インタビューデータ、A)

留学など海外への渡航は費用がかさむのに比べ、ITC であれば安価に学習環境を提供できることの利点を語っている。また、「言葉の機能への気づき」として、次のような例があった。

で、TA だったんで、やっぱ説明とかする段階で、そのまあ、いろいろ調べたりとか、下準備もした中で、その、あ、でも伝わるんだって思って、やっぱ。それが一番うれしかったです。

(インタビューデータ、A)

説明する立場として、英語が得意ではない参加者にも自分の英語が伝わったうれしさを語っている。次に、「自分の能力への気づき」として、次のような例があった。

自分の英語力の低さを感じて、まあでも、英語力は低いけど、まあでも案外2日間英語しか喋らなくても生きていけるんだなっていうふうに感じて、こう…。

(インタビューデータ、B)

英語を使ってみて実感した力の不足を語っている。「学習法への気づき」として、以下の具体例を示す。

いくらその暗記とかで単語とか覚えてても、文法の問題が解けたとしても、実際に話せないとだめだな〜って。

(インタビューデータ、A)

英語を実際に使うことが学習の上で大切であるという認識を語っている。

(2) 活動の立ち上げ・運営についての学び

「活動の立ち上げ・運営についての気づき」と「今後の展望」が含まれる。前者の例として以下の2つを示す。

たぶん、まあ自分でやったし、実験的な、個人的に実験的な目的があったとしても、それ以上の成果をあげられたこと、まあ、多分もう、一生忘れないかなって思います。

(インタビューデータ、A)

本人は予想以上の成果が出たと認識しているのがわかる。

あ〜でも、こうどちらにせよ、どうなんですかね、感覚の違いは特になんですけど自分で作った方がやっぱこう、オリキャンもオリキャンで凄い意欲はあって、でもそのITCはITCでこう設立に携われたので意欲はその分高いし、このまま継続していけるように、もっと良いものになったら良いなとかっていうふうな気持ちはあります。

(インタビューデータ、B)

「オリキャン」とは参加者の通う大学で実施される、上級生が新入生のために学生がほぼ完全に主体となって実施するオリエンテーション合宿である。彼女は、すでに学生のみで主体的に実施することが伝統になっている「オリキャン」を参照し、ITCも自分たちで実施したという点において、通じるものがあると語っている。また、「今後の展望」として、以下の具体例を挙げる。

う〜ん、どうしたら良いんですかね。もっと凝ったものにするとか。日数を増やすとか。できるかどうかはわからないですけど、そういうのがあったら、もし可能なのであればきっと、楽しそうです。いろんなこともできますし。

(インタビューデータ、B)

今後も継続して行い、もっと工夫を凝らし、日数を増やすことを提案している。

(3) 上昇志向

「英語の学習意欲」、「多様性への接触欲求」、「新しい知識への好奇心」が含まれる。「英語の学習意欲」の例として、以下を挙げる。

まあ、やっぱり「できた」じゃないですかね。自分が、自信がついた時なんじゃないですかね。ていうのありますよね。あ、この英語で通じたわってことで会話が成り立つ。で、楽しいなって思う。

(インタビューデータ、A)

参加者の意欲が向上した様子を踏まえ、「何がそうさせたのか」との問いに対する回答である。成功体験の重要性を語っている。「多様性への接触欲求」の例として次の語りを挙げる。

いろんな人とコミュニケーションをはかりたいと思ったので、英語を話せるようになりたいとか、そういう考えに繋がったんじゃないかなって。

(インタビューデータ、B)

「英語を学習する理由は何か、そしてどういうきっかけで立ち上げに関わったのか」という問いに対する回答という文脈の中での発話である。いろいろな人とのつながりを求める志向が見られる。次に、「新しい知識への好奇心」への例を挙げる。

その海外行って、その、こういう英語、自分の英語で通じるって自信もつくんじゃないかな、ていうのは思っていました。と思って、実験したいじゃないですけど…。

(インタビューデータ、A)

英語に囲まれることの有効性を留学で自分が体験し、それを疑似的に作り、他人にも体験させてその効果を知りたいという探究心が見て取れる。

(4) 自分の将来

「自分の将来」の1つの概念が含まれる。以下に例を示す。

(会社を作ることは) いけるんじゃないですかね。今思いついたんですけど。うーん、でもまあ、機会があったら、機会とお金があったら、そういうの (ITC のようなもの) やってみたいかなって感じですね。いけそう。

(インタビューデータ、A)

会話の最中にひらめいた考えが語られている。留学などの英語に浸かるためのプログラムはどれも費用がかかることを問題視したうえで、ITC のような取り組みであれば、お金をかけずに、素晴らしい環境が作れるのではないかという考えを述べている。

総合考察

本研究の目的は、新たに課外活動として立ち上げた ITC の実践報告をするとともに、立ち上げに関わった学生の変容を分析することであった。そこでまず、ITC の実践内容を詳細に記述した。参加者の通う大学では前例のない初の試みであるという条件の元で行われた本取り組みを、具体的な活動内容の細部にわたって報告できたこと

の意味は大きい。また、学生が主体となって立ち上げたことに加え、立ち上げ、参加に大きなコストがかからないという点も特筆に値する。

本研究は次に、TAとしてITCの立ち上げに携わった学生にインタビューをし、認知面、情意面での変容を質的に分析した。以下、認知面、情意面の変容の様子について総合的に考察した上で教育実践における運用面への示唆を述べ、最後に今後の課題を述べる。

認知面においてまず、「学習環境・リソースへの意識」に関する語が多く観察された。特に、英語に囲まれる環境の有効性や英語を学ぶ機会の重要性の認知に関するものが多い。ただし、ITCの立ち上げのような具体的な行動に結びつくには、それに加え経験者による紹介とアイデアの提供とが重なり合うことの必要性が示唆される。昨今の大学生には、外国人留学生とコミュニケーションをしたり、海外旅行や語学研修に出かけるといった経験をしている学習者も少なくない。そのような経験を得ると、実際にコミュニケーションのツールとして英語を使うことや、英語環境に一定期間浸かることの重要性を認知していることが多い。しかしながら、国内で自分たちの手で英語環境を作り出し、そこに浸かるという発想に至るには、もう一步隔たりがあるように思われる。あるいは、逆に英語を上達させるためには英語圏の国や地域に行かなければならない、英語ネイティブと会話しなければ効果がないなどと言った信念を形成してしまっていることもあり得るだろう。従って、まずは経験者による活動の紹介をした上で、実際にそれらを疑似的に体験することによって学習に対する有効性の認知を高めること、さらに適宜活動の立ち上げや改良に関するアイデアを提供していくことが教育実践の運用面では大切であると考えられる。

また自身の英語の使用経験から、「言語の機能への気づき」、「自分の能力への気づき」、「学習法への気づき」につながっていると言える。特に「自分の能力への気づき」に関しては、肯定的であれ否定的であれ、「英語の学習意欲」に結びつくことが示唆される。これまでも、イメージングプログラムやそれに類した状況に学習者がおかれ、学習意欲が高まることは報告されている (e.g. 智原・加藤, 2008; 桜井, 2015; 二五, 2015) が、「自分の能力への気づき」から「英語の学習意欲」へ移行する様子を示した点で本研究は意義があると言える。本研究の調査対象者はTAとして参加者にわかりやすく説明する立場にあり、自分の説明が参加者に伝わったかどうかは随時即時にフィードバックされるため、気づきへの意識が高まったと考えられる。そのように考えると、企画や運営に関して学生に主体性を持たせることは教育実践場面において大きな意味を持つと言えよう。

「活動の立ち上げ・運営についての学び」についても多くの語が見られた。一般の参加者とは異なり、いかにプログラムを改善していくかという志向が一段と強く現れている。興味深いのは、こういった学びに言及する場合、調査対象者は自分自身の経験における理想の学習環境・条件を参照している点である。そしてそれを基準に「今後の展望」として、具体的な提案や、希望を述べている。

「上昇志向」に関しては、上述の通り、「英語の学習意欲」のほか、「多様性への接触欲求」に関する語もいくらか見られた。英語がコミュニケーションのツールであるということを、体験により再認識し、そのツールを磨くことによって、多様な人や文化との出会いを望む意欲が見て取れる。「新しい知識への好奇心」は、代表者のみに見られ、自分のアイデアがうまくいくかどうかを実験的に試して、その結果を知りたいというものに限定された。このような好奇心が、物事を新しく立ち上げることにどのように結びつくかは、今後検討の余地がある。

最後に、「自分の将来」に関しても、興味深い語りが観察された。調査対象者は2人とも元来英語を教えることに興味を持っていた。Bは、その意志はITCの実施前から実施後まで変わらず、その気持ちを維持、強化している。一方、代表者を務めたAは、以前は英語教師を目指していたものの、多様性への接触経験によって、気持ちが揺れ始めていた。ITC実施段階では3年生であったが、将来の目標は定まっていなかった。しかし、インタビューを進めていく中で、以前持っていた英語を教えることに対する興味と、ITC実施の経験が結びつき、会社を立ち上げるという発想に至った。このように、自主的に立ち上げに関わるという経験が、「自分の将来」への認識に影響を与える様子を見出せたことには教育実践上大きな意義がある。

本研究の今後の課題として、以下の2点が挙げられる。第1に、より多様性に富んだプログラムを企画・実施し、一つ一つの活動を個別に評価して英語学習に与える影響を検討していく必要がある。第2に、認知面、情意面の変容プロセスをより客観的に検討することである。本研究における調査は、インタビューによる自己報告を用いた。また、インタビュー対象者の人数が少なかったことも、結果の一般化には慎重にならざるを得ない。合宿の規模を

大きくし、より多様で数多くの企画者、参加者を対象に量的な調査を含めて、多角的な検討が必要になっていくであろう。

引用文献

- ETS. (2015). Test and score data summary for TOEFL iBT tests (January 2015-December 2015 Test Data). Retrieved on October 17, 2016 from (https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf#search='Test+and+score+data+summary+for+TOEFL+iBT+tests').
- Liskin-Gasparro, J. (1998). Linguistic development in an immersion context: How advanced learners of Spanish perceive SLA. *The Modern Language Journal*, 87 (3), 343-364.
- Rugasken, K., & Harris, J. A. (2009). English Camp: A Language Immersion Program in Thailand. *Learning Assistance Review*, 14 (2), 43-51.
- Walker, C., & Tedick, D. (2000). The complexity of immersion education: Teachers address the issues. *The Modern Language Journal*, 84 (1), 5-27.
- 石橋嘉一・三輪眞木子 (2014).「英語専攻の日本人大学生における授業外英語学習の実態調査－英語学習内容のカテゴリ分析と言語熟達度との関係－」.『日本教育工学会論文誌』, 38 (1), 39-48.
- 桜井延子 (2015).「グローバル人材育成のための合宿型英語集中講義」.『高等教育フォーラム』, 5, 107-120.
- 智原哲郎・加藤映子 (2008).「短期集中英語合宿が学習に及ぼす効果」.『大阪女学院大学紀要』, 5, 157-171.
- 二五義博 (2015).「ヨーロッパの CLIL (内容言語統合型学習) に関するパイロットスタディ－呉市公開講座における CLIL 的授業の実践を通して－」.『中国地区英語教育学会研究紀要』, 45, 61-70.
- 藤井清美・ブレントライト・ステファニーレイノルズ・グエンハン・ジャスティンウィットティングヒル・アンドリューガーガリー (2014).「英語イマージョンキャンプ:モチベーション向上をねらった留学擬似体験研修実践」.『KIT progress : 工学教育研究』, 21, 13-23.